講演会

鈴木まもるさんによる講演会
絵本と鳥の巣の不思議
－鳥の巣が教えてくれること－

講師：鈴木 まもる さん（絵本作家、鳥の巣研究家）

■はじめに

鈴木まもるさんは、1952 年東京生まれ、1986 年より伊豆に在住し、画家・絵本作家として創作活動を続けていらっしゃいます。

代表作には、『せんろはつづく』（金の星社）などがあり、『どこからきたの?おべんとう』（金の星社）は、2021 年度第 67 回青少年読書感想文全国コンクールの課題図書にも選ばれました。また、鳥の巣研究にも尽力され、鳥の巣の展覧会も行うなど、精力的に活動されています。今回は伊豆のアトリエからオンラインで講演していただきました。

■絵本のこと

子どもにとって、お母さんの膝の上で一緒に本を読むことは、かけがえのないものです。親子で物語の世界を分かち合うことで、子どもは安心感を覚えます。そして、分かち合った世界から、生きていく上で必要な力を得るのです。ですから、ぜひ、子どもが面白い、うれしいと感じる本を、絵本に近い距離で楽しんでください。その経験こそ、子どもが本を好きになるきっかけになると思います。

ぼくは、みんなと同じことをし続けたり、決められたことをやらされたり、歴史を暗記したり、数字を計算することが苦手な子どもでした。学校の点はよくありませんでした。でも学校がすべてではありません。子どもたちそれぞれの良さを認め温かく見まもってあげてください。自然に育ち、その子なりの生き方、成長をしてほしく、いろいろな表現の絵本を描いています。

■鳥の巣研究家になった理由

ぼくは伊豆の山の中でくらしているのですが、ある日、藪の中に鳥の巣が落ちているのに気が付きました。それ以来、様々な鳥の巣を発見し、持ち帰るようになりました。

いざ何の鳥の巣か調べようとしたのですが、図書館にも、書店にも、図鑑はあるのに鳥の巣に関する本はありませんでした。

ぼくは絵本作家なので、鳥の巣の形や造形に興味が湧きました。また、鳥がどのように巣をつくるのか、想像がつかず、ますます鳥の巣について知りたくなりました。

鳥の巣を知るということは、鳥のくらしを知るだけでなく環境を知ること、多様な生き方を知ることでした。鳥類学者を訪ねたり、日本だけでなく海外の鳥の巣も探しに行き、その魅力を伝えたく、絵本を描いたり鳥の巣の展覧会をするようになりました。こうして、鳥の巣研究家と呼ばれるようになってしまいました。

■質問を受けて

ここで、事前に頂いた質問についてお答えしようと思います。

（質問1）絵本作りのアイデアはどのように考えるのですか?

本によって様々です。暮らしの中で、描きたいものが自然とまとまってできる場合もあれば、『あるヘラジカの物語』（あすなろ書房）のように、1 枚の写真を見て感じたことをまとめる場合もあります。

（質問2）乗り物絵本についてのおはなしが聞きたいです。

子どもたちの中には、乗り物の絵本が大好き!という子も多いと思います。これは、身近なくらしへの本能的な興味だと思います。ヒーローにあこがれるのも同じで、自分が暮らすテリトリーを広げたい、守りたいという気持ちに起因していると思います。

絵本は、ページをめくって、ある世界に入っていくことだと思います。その絵本が好きになるということは、自分自身の生き方を見つけることだとも思います。世の中の多様な生き方が感じられ、嬉しくなるような絵本を描きたいです。

■鳥の巣について

鳥は、小型恐竜が大型恐竜の捕食から逃れ、安全に子孫を残すために進化した姿です。飛ぶためには、体が軽量である必要があるため、鳥は人間のように体内で子どもを育てることはせず、卵を産みます。しかし、卵と孵化したヒナは外敵に食べられてしまうので、安全に守る場所が必要です。これが鳥の巣というわけです。つまり、鳥の巣は鳥がくらす家ではなく、ヒナが巣立つまでの間、ヒナを守る子宮の様な場所なのです。

■鳥の巣の作り方

それでは、鳥はどのように巣を作るのでしょうか?鳥は卵が転がらないように、卵を産み落とす場所を囲むように、円を描くように材料を配置します。

卵から孵ったヒナの状態は鳥によって違います。卵から孵った後、ヒナがすぐに歩き出すような鳥（早成性）もいれば、まだ毛も生えていない未熟な状態で孵る鳥（晩成性）もいます。後者の鳥の巣は、孵化した後もヒナを守るように、お椀のような形になります。また、上から敵に狙われる場所に巣がある鳥は、さらに卵やヒナを囲うため、球状の巣を作ります。寒い地域には、羽毛や羊毛を用いた鳥の巣もあります。

このように、鳥によって、安心して卵を産める環境は異なるため、巣の形だけでなく、材料も様々なものが使われ、結果として多くの種類の鳥の巣が出来上がるわけです。

■巣箱の観察

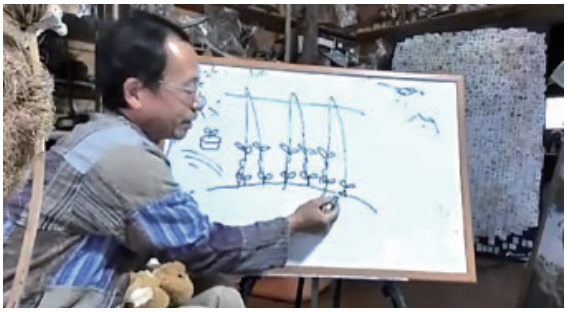
鳥の巣箱をかけたことのある方はいるでしょうか? ぼくは、巣箱の中の様子が知りたくて、ガラス窓の外側に直接巣箱を貼り付けて、室内の小さな観察穴から巣の中を見てみることにしました。(『巣箱のなかで』)

親鳥は、かわるがわるヒナにえさを運び続けていました。やがて、ヒナが巣立つ頃、親鳥たちは、あえてえさを巣箱に運び入れることはせず、外の枝からヒナたちに呼びかけていました。中には臆病なヒナもいて、なかなか外に飛び出してきません。けれども、親鳥たちは決して急がず、ヒナが外に飛び立つのを誘い、待っていました。ようやくヒナが飛び出すと、親鳥はやっとえさを与えました。こうして外の世界で生きることを教えていくのです。ぼくはこの光景をみて、自分で生きていく力を身に着けるという点において、鳥も人間も同じであると感じました。

■おわりに

鳥の巣を研究していると、鳥のくらしや生き方など、どんどん興味関心が広がっていきます。鳥の生き方には、人間に相通ずる点が多いことに気が付きました。

子どもたちは自分で面白い、と思ったことはどんどん知りたがると思います。それこそ本当の学びだと思うのです。ぜひ、子どもたちを温かく見守ってください。自分が面白いと思うことを実際の世界と本で調べていくことが、その子が生きていく力になるはずです。



（記録：埼玉県立久喜図書館　家根本 ありか）